

沖縄県営鉄道「転車台」遺構の公開について

沖縄県営鉄道は、1914（大正3）年、那覇駅を起点に与那原を結ぶ与那原線が開業しました。その後、1922（大正11）年に嘉手納線、1923（大正12）年に糸満線と各路線が開業し、当時の沖縄の人々の足として、また物流輸送の重要な手段として利用され、「ケビン（軽便）鉄道」の愛称で親しまれていました。

起点となる那覇駅には、赤瓦葺の木造駅舎や鉄道管理所、職員住宅、交番などの建物が、構内には路線のホーム、機関庫、修車庫、石炭置場のほか、機関車を方向転換させる「転車台」があり、これは県内で唯一那覇駅に設置されていたとされています。

県営鉄道は、沖縄戦でほぼ全て破壊され戦後再び復興することはありませんでした。戦後間もなく那覇駅周辺は区画整理され、駅があった場所には、鉄道に代わって沖縄の交通の拠点となる那覇バスターミナルが建設されました。

これまで鉄道関連の施設は、戦中から戦後にかけて全て破壊・撤去され残っていないと思われていました。ところが、2018（平成27）年から始まったバスターミナル一帯の再開発工事中、「転車台」の遺構が発見され、驚きと同時にマスコミでも報道され大変注目されました。

再開発工事に先立ち発掘調査を行った結果、遺構はかなり破壊されていたものの、幸い形状や規模がわかる状態で残っていました。また、「転車台」の構造や工法なども確認され、多くの貴重な成果を得ることができました。

発掘調査終了後「転車台」遺構は、沖縄の鉄道・交通の歴史を物語る上で大変貴重な文化財であることから、那覇駅だけでなく沖縄県営鉄道全体の存在を多くの人々が実感できるように改めて保存する方向で検討され、旭橋都市再開発株式会社、沖縄都市モノレール株式会社をはじめ、多くの関係機関のご理解・ご協力により移設して保存することができました。

今回、「転車台」遺構を交通広場に移設・保存・公開するにあたり、より理解を深めて頂けるよう、説明板と転車台に機関車が乗った6分の1イメージ模型も並置しました。

「転車台」遺構が広場のシンボルとなり、人々から愛されることを願い、保存・活用に努めてまいります。



発見された「転車台」遺構



発見された「転車台」遺構



基礎に埋め込まれた木杭



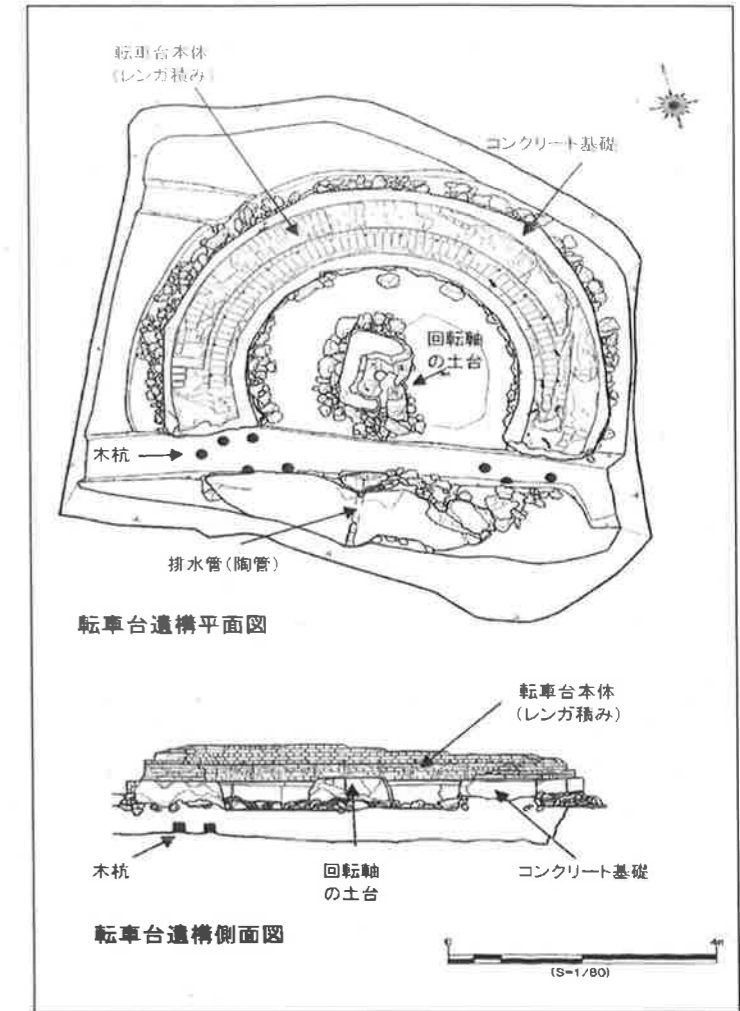
発掘調査の様子



中央回転軸の基礎



陶製の排水管



「転車台」遺構

大きく分けて3つの部分から構成される。円形状のコンクリート基礎部と、その上部にレンガをイギリス積と呼ばれる方法で積み上げた円形状の本体部、中央に位置する方形の回転軸部。
※イギリス積：長手の段と小口の段を交互に配置。縦方向の目地が一直線に並ばないようにして強度を保つ積み方。

【規模】

直径：約6.8m（レンガを円形に積み上げた本体部）
高さ：約1.1m（コンクリート製基礎部から、最も残りの良いレンガ上部まで）

①レンガ積の本体部（2段構造）

1段目：幅約95cm（レンガ4段積）
2段目：幅約50cm（最も残りの良い部分でレンガ5段積）
※終戦直後の写真から2段目は本来13段積と推測される。
レンガのサイズ
長さ：約22～24cm 幅：約11cm 厚さ：約5.8～6cm

②コンクリート基礎部

幅：約1.3～1.5m 高さ：20～40cm
※南側の基礎部に排水溝として、直径約12cmの陶管が埋め込まれている。

③回転軸部

縦・横：約1.4m（本来は正方形と推測されるが東側が破損している）
高さ：約50cm
※中心部は縦・横約60cm 方形状にくり抜かれる。



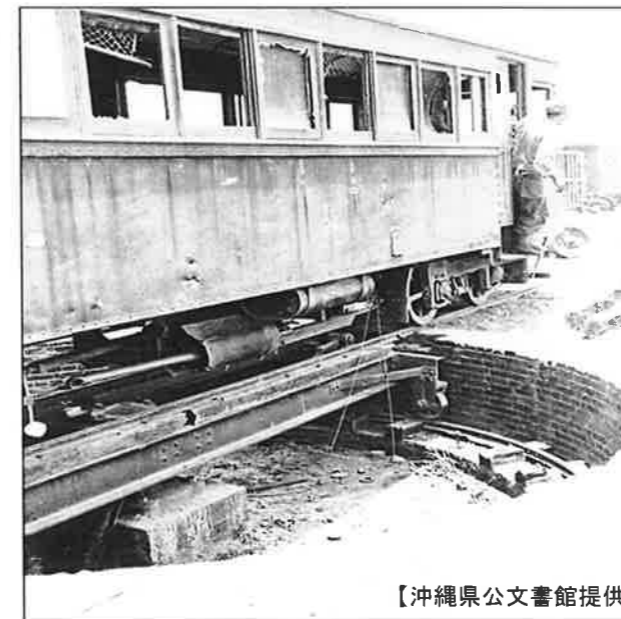
【那覇市歴史博物館提供】

戦前の那覇駅前の様子



【那覇市歴史博物館提供】

戦前の那覇駅構内の様子（左側中央の円形施設が転車台）



【沖縄県公文書館提供】

ガソリンカー（車両）が乗った終戦直後の転車台